

2019年度企画展

「関西大学の学生運動」の記録

2019年度の年史企画展「関西大学の学生運動」は、1969年6月20日の関西大学会館封鎖を発端とした学園紛争が、今年で50年を経過し、自分自身の体験として語ることのできる人々は、学内ではわずかとなってしまったことから、関西大学でこれまでに起こった学生運動について、年史編集室が所蔵する資料から振り返る展示会として開催した。

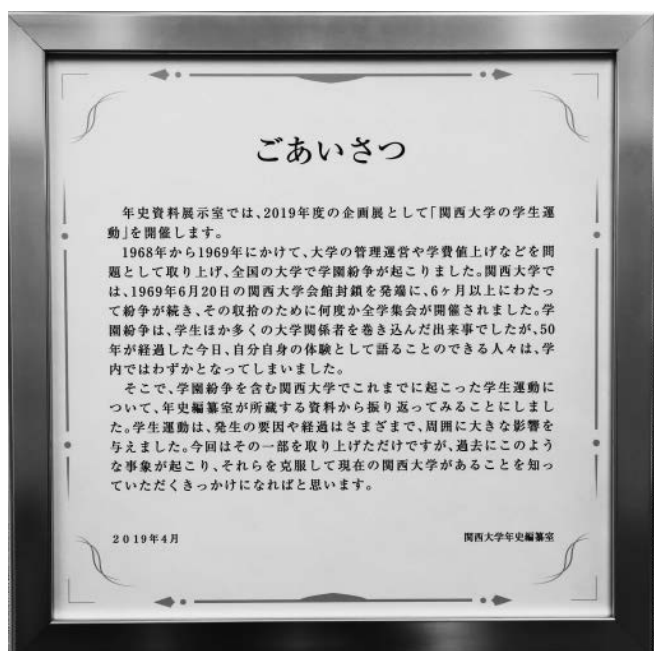
企画展示室には、展示パネル12枚（ごあいさつ1枚、大1枚、中2枚、小8枚）を掲示し（大パネルのみ本文縦書き）、大型ケースに学生運動に関する現物資料や写真を展示した。

一 展示パネル

ごあいさつ

年史資料展示室では、2019年度の企画展として「関西大学の学生運動」を開催します。

1968年から1969年にかけて、大学の管理運営や学費値上げなどを問題として取り上げ、全国の大学で学園紛争が起きました。



年史編集室

ごあいさつ

関西大学では、1969年6月20日の関西大学会館封鎖を発端に、6ヶ月以上にわたって紛争が続き、その收拾のために何度か全学集会が開催されました。学園紛争は、学生ほか多くの大学関係者を巻き込んだ出来事でしたが、50年が経過した今日、自分自身の体験として語ることでできる人々は、学内ではわずかとなってしまいました。

そこで、学園紛争を含む関西大学でこれまでに起こった学生運動について、年史編纂室が所蔵する資料から振り返ってみることにしました。学生運動は、発生の要因や経過はさまざまですが、周囲に大きな影響を与えました。今回はその一部を取り上げただけですが、過去にこのような事象が起こり、それらを克服して現在の関西大学があることを知っていただければと思います。

2019年4月

関西大学年史編纂室

大型パネル

大型パネルは、「関西大学の学生運動」のタイトルで、大学創立から1969年までの関西大学の動きと、その間に起こった学生運動を年表形式で紹介した。小パネルで取り上げなかった学生運動に関しては、簡単な解説を加えた（表1）。

中型パネル

展示ケース横の中型パネル2枚のうち、1枚は学生運動に関して発行された様々な印刷行物を紹介するパネルとした。またもう1枚は、1969年の学園紛争で学生たちが配布した大量のビラや大学の刊行



大パネル「関西大学の学生運動」

表1 大パネル「関西大学の学生運動」

1886(明治19)年11月	願宗寺にて関西法律学校開校(写真1 願宗寺)
1887(明治20)年4月	興正寺に移転
1893(明治26)年12月	司法省指定学校として認可 関西法律学校の卒業生には、判事・検事登用試験の受験資格が与えられる。 (写真2 「司法省指定」と記す関西法律学校の文書)
1902(明治35)年5月	文部省の認定を受ける 徴兵令第13条により文部大臣の認定を受け、在学生は徴兵猶予の特典が与えられる。
1903(明治36)年12月	江戸堀校舎に移転
1904(明治37)年1月	専門学校令による専門学校として認可
1905(明治38)年1月	私立関西大学と改称
1906(明治39)年12月	福島学舎に移転
1914(大正3)年10月	母校改革運動が起こる(パネル) (写真3 福島学舎、岡村博士と斎藤学長がデザインされた記念絵はがき)
1918(大正7)年12月	大学令公布 大学令により、これまでの国立大学だけでなく、公立や私立の大学設立が認められた。関西大学は「大学」を名乗っていたが、実際は専門学校令による専門学校であったので、大学令による大学となるための体制作りを始めた。資金面では、大阪商業会議所会頭で、後に本学の総理事兼学長となる山岡順太郎の協力を得て、募金活動を進めた。 (写真4 山岡順太郎(1886-1928))
1921(大正10)年2月	大学設立認可申請書を文部省に提出
5月	三笠山血盟事件が起こる 本学の大学設立認可が下りないことに危機感を覚えたのは、予科の学生であった。特に2年生は、専門学校ではなく、大学としての関西大学に進学できるかどうか、直接影響を受けるため切実であった。そのため、5月16日に奈良の三笠山に集合、大学昇格実現を要求する血判の盟約状を作成し、学校に提出した。
1922(大正11)年6月	大学令により関西大学として認可され、法学部・商学部と大学予科を設置
1923(大正12)年11月	専門部の向上運動が起こる 大学令により私立大学と国立大学の差は払拭されたが、専門学校令による専門部は依然として変化が無く、大学と専門部の間には大きな差があった。この格差の解消と専門部の向上を求め、さまざまな活動が展開された。例えば、11月17日、本学と法政大学・明治大学・日本大学・専修大学・中央大学の6大学は「全国私立大学専門部学生連盟」を結成し、議会や文部省へ働きかけを行った。活発な活動の結果、1924(大正13)年5月に専門部卒業生は、高級官僚の採用試験である高等試験の予備試験の免除と、大学学部入学の資格が認められた。 (写真5 予備試験免除を要求して皇居前をデモ行進する学生)
1927(昭和2)年10月	昭和2年の紛擾事件が起こる(パネル)
1930(昭和5)年6月	専門部・第二商業学校の同盟休校事件が起こる 6月17日、学友会(専門部2部)から、「授業料3割値下げ」など7項目の要求書が仁保亀松学長に提出された。理事会がこれを拒否したため、学生たちは同盟休校を決議した。さらに、この影響を受けて、第二商業学校でも、内多精一校長に専門部と共通する要求書を提出する事態となった。しかし、学生側の要求はほとんど受け入れられることなく、検挙者と36名の退学処分者を出し、この事件は2週間ほどで終結した。 (写真6 同盟休校事件で天六学舎に集まる学生たち)
1933(昭和8)年12月	文科廃止反対ストライキが起こる 1928(昭和3)年に文学部が開設され、法学部は法文学部と改称したが、入学志願者が集まらず、赤字が続いていた。理事会は1936(昭和11)年3月末での閉講を決めたが、文学部の学生たちはこれを不服とし、12月1日に文科廃止反対を宣言、ハンガーストライキに入った。新聞紙上に大きく取り上げられ、世間の注目を集めたハンストは、12月4日まで続いた。その後、文学部の取り扱いについて再協議が行われ、学長は文学部存続を明言し、事件は終結した。
1938(昭和13)年7月	学生の集団勤労奉仕が始まる
1941(昭和16)年7月	学友会が解散し、報国団を結成する
1943(昭和18)年11月	学徒出陣者への仮卒業式と壮行会を挙行
1948(昭和23)年4月	学制改革により新制大学に移行し、法学部・文学部・経済学部・商学部の4学部を設置
1958(昭和33)年4月	工学部を設置
5月	名神高速道路の学内通過問題(パネル) (写真7 高速道路問題を初めて報じた関西大学新聞(1958年1月15日付))

1960年代	学費改定に対する反対運動が起こる 高度経済成長による物価上昇の影響から、1960年代はたびたび学費改定が実施された。1961(昭和36)年の改定では、理事会、教授会、教員・職員組合、学生の代表で構成する4者協議会を設置し協議が行われた。学生側は、学費貸与条件の緩和、学生寮の新・増築、学舎暖房の実施などを要望し、これをうけて、学生の利便を図った奨学金規定が施行された。 1963(昭和38)年の改定では、学生たちは千里山学舎で抗議集会を開いたあと、約1000人がバスで大阪市中之島公園に集まり、天六学舎までデモ行進をした。 1965(昭和40)年の改定でも、学生たちは大阪市の扇町公園から天六学舎までと、大手前公園から天王寺公園まで、反対を叫んでデモ行進した。(写真8 徹夜で行われた協議会)
1967(昭和42)年 4月	社会学部を設置
1969(昭和44)年 1月	社会学部学舎のバリケード封鎖 (写真9 社会学部学舎出入り口に整然と築かれたバリケード)
6月	関西大学会館のバリケード封鎖、学園紛争が起こる(パネル) (写真10 全学集会に乱入した武装学生)

表2 中パネル2「学園紛争のピラと記録」

	日付	内容	発行者
1	1/17	ストライキ提案	社会学部自治会執行委員会他
2	5/24	大学立法・中教審答申粉碎！大衆団交議案書	文学部自治会
3	5/26	『カルチュ』創刊号(サークル闘争委員会結成！)	サークル闘争委員会
4	6/18	6・20全学大衆団交を圧倒的に勝利せよ！	文学部闘争委員会・全共闘
5	6/21	学生諸君へ	各学部長
6	6/21	『関西大学新聞』号外(全共闘結成！)	新聞会
7	6/23	学生諸君に告ぐ	学長 中谷敬寿
8	6/23	学長所見	関西大学 中谷敬寿
9	6/23	関大民主化めざし全学集会を実現しよう！	全学連絡会議・法学部自治会
10	6/24	〔関西大学会館封鎖継続の呼びかけ〕	関大全共闘
11	6/25	一般学生諸君起ち上がれ！！	国文学科1回生一同
12	6/28	本日の大衆団交 公開教授会に総結集し当局の話し合い路線＝闘争収拾策動を粉碎し、五項目要求を貫徹せよ！	全学全共闘
13	6/28	機関紙『関大』167号付録	関西大学校友会
14	7/3	個別関大 中教審 大学立法粉碎！ 全学集会	各闘争委員会連絡会議
15	8/1	全関西大学の皆様へ	関西大学学長 中谷敬寿
16	9/8	この現況に於いて授業強行は何を意味するのか！…？…！	文学研究科院生協議会
17	9/8	『関西大学新報』号外	関西大学新報社
18	9/9	改革なき破壊を阻止しよう！立ち上がれ関大生	関大再建委員会
19	9/12	関大の英知を建設に向けて集結しよう！	関大の声
20	9/24	〔大学立法粉碎、学長代行選挙粉碎の旗の下、バリケード陣地を奪還せよ！〕	関大全共闘
21	9/29	正しい学園民主化に向けて全学友は起ち上ろう！	全学連絡会議
22	10/3	君たちは試験を受けなくても生きてゆける！	文化団体共闘会議
23	10/6	無期限スト決行中！	全共闘、工学部闘争委員会
24	10/14	当局による闘争圧殺＝「機動隊常駐」「授業再開」「検問」を実力で粉碎し、10月非常体制を突破せよ！	全共闘、史学科闘争委員会
25	10/17	始動せよ！関大ルネサンス＝新文化創造の学園改革へ＝	関大再建委員会

物のなかから25枚を取り上げて紹介するパネルとした(表2)。

【中パネル1 学生運動を伝えたメディア】

関西大学学友会自治記念絵はがき

1914(大正3)年の母校改革運動が終結し、学友会の自治が認められたことを記念して発行された絵はがき。現在、2種類が確認できていて、ひとつが福島学舎と事件を解決に導いた岡村司博士と斎藤十一郎学長を載せるデザインである。

関西大学向上記念メダル

大学と専門部の格差解消を求め、本学と法政大学・明治大学・日本大学・専修大学・中央大学の6大学は「全国私立大学専門部学生連盟」を結成し、議会や文部省へ働きかけを行った。活発な活動の結果、専門部卒業生は、高級官僚の採用試験である高等試験の予備試験の免除と、大学学部入学の資格が認められた。メダルに刻まれた1924(大正13)年5月22日は資格認定が官報に掲載された日である。

教育後援会「会報」特別号

1969(昭和44)年6月20日の関西大学会館封鎖と、それに続く紛争で全共闘学生と一般学生の双方に負傷者が出たことは、父母に憂慮をもたらした。大学当局は紛争解決に向けて懸命の努力を重ねていったが、教育後援会も善後策を協議した。そして何よりもまず、なぜ紛争が起こったのか、その理由を明らかにすることと、紛争の経過をできるだけ詳しく知らせて親子で話し合うことが必要との結論にいたっ



中パネル2「学園紛争のピラと記録」



中パネル1「学生運動を伝えたメディア」

た。そこで後援会は7月21日に「会報」特別号を発行し父母と教職員に郵送した。「会報」特別号は、紛争を早期に解決させようとする父母の一致団結した要望をまとめるために大きな役割を果たした。

『関大紛争の実態報告』『関大紛争の実態報告 No.2』

関西大学における学園紛争の事実経過については、大学本部広報係編集の『関大情報』により報告が行われていたが、文字情報のみであった。それに対し『実態報告』は、同じく広報係の編集であったが、被害の実情を直接に見てもらうために、写真集として発行した。

『実態報告』は関西大学会館の状況を中心に1969（昭和44）年7月15日までの学内の様子を紹介し、続く『実態報告 No.2』では、各学部学舎と誠之館の荒れ果てた様子と、10月に再開した授業風景を取り上げている。

写真1 関西大学学友会自治記念絵はがき（1914年）

写真2 関西大学向上記念メダル（1924年）

写真3 教育後援会「会報」特別号（1969年）

写真4 『関大紛争の実態報告』『同No.2』（1969年）

二 小パネル

小パネルでは、1886（明治19）年の創立以降、本学で起こった学生運動から、母校改革運動（1914年）、紛擾事件（1927年）、名神高速道路の学内通過問題（1958年）、学園紛争（1969年）の4つを取り上げ、その発端から経過、終結に至る過程を、当時の写

真を掲載し解説した。

【小パネル1 1914年 母校改革運動 発端と経過】

母校改革運動は、現在の関西大学が退歩の状態にあり、専門学校から大学への昇格の見込みがない事に危機感を持った学生たちが、その改革を唱え起こった。

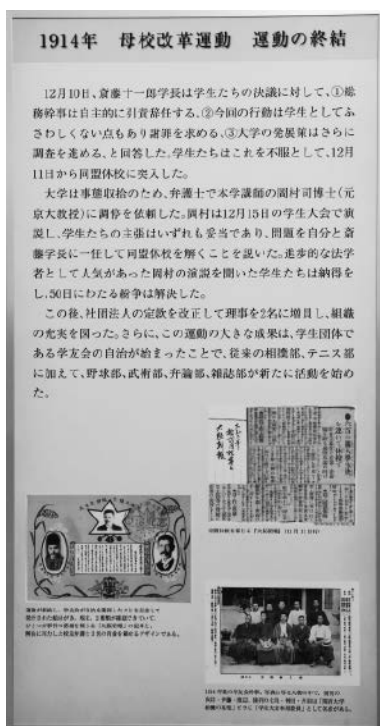
400名を越す学生が集まった1914（大正3）年10月30日の学生大会と、卒業生の協力を取り付けた11月30日の学生大会（約300名出席）で、次のような内容の決議をした。

- ・ 大学昇格のため、社団法人を財団法人に変更すること。
- ・ 大阪在住の大人物を新たに総長とし、総長が学長を推薦すること。
- ・ 会計の公私混同のうわさがある、事務を担当する総務幹事の辞職を求めること。

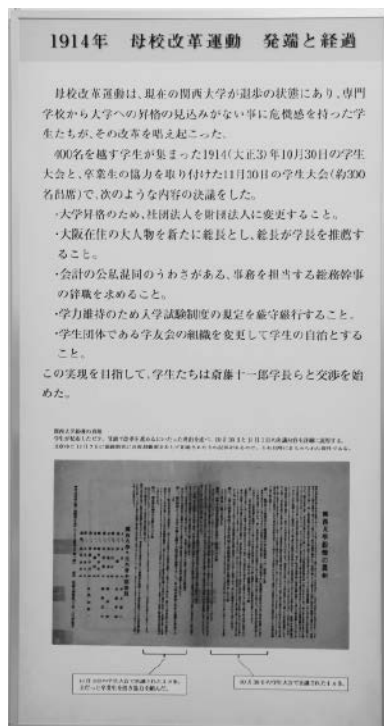
・ 学力維持のため入学試験制度の規定を厳守厳行すること。
・ 学生団体である学友会の組織を変更して学生の自治とすること。
この実現を目指して、学生たちは斎藤十一郎学長らと交渉を始めた。

写真 関西大学紛擾の真相

学生が配布したビラ。冒頭で改革を進めるにいたった理由を述べ、10月30日と11月3日の決議内容を詳細に説明する。文章中に11月7日に総務幹事に再度辞職要求をして拒絶されたとの記事があるので、それ以降にまとめられた資料である。



小パネル2 「1914年 母校改革運動 運動の終結」



小パネル1 「1914年 母校改革運動 発端と経過」

【小パネル2 1914年 母校改革運動 運動の終結】

12月10日、斎藤十一郎学長は学生たちの決議に対して、①総務幹事は自主的に引責辞任する、②今回の行動は学生としてふさわしくない点もあり謝罪を求める、③大学の発展策はさらに調査を進める、と回答した。学生たちはこれを不服として、12月11日から同盟休校に突入した。

大学は事態收拾のため、弁護士で本学講師の岡村司博士（元京大教授）に調停を依頼した。岡村は12月15日の学生大会で演説し、学生たちの主張はいずれも妥当であり、問題を自分と斎藤学長に一任して同盟休校を解くことを説いた。進歩的な法学者として人気があった岡村の演説を聞いた学生たちは納得をし、50日にわたる紛争は解決した。

この後、社団法人の定款を改正して理事を2名に増員し、組織の充実を図った。さらに、この運動の大きな成果は、学生団体である学友会の自治が始まったことで、従来の相撲部、テニス部に加えて、野球部、武術部、弁論部、雑誌部が新たに活動を始めた。

写真1 同盟休校を報じる『大阪朝報』（12月11日付）

写真2 運動が終結し、学友会が自治を獲得したことを記念して発行された絵はがき。現在、2種類が確認できていて、ひとつが事件の落着を報じる「大阪朝報」の記事と、解決に尽力した校友弁護士3名の肖像を載せるデザインである。

写真3 1914年度の学友会幹事。写真に写る人物の中で、前列の向井・伊藤・渡辺、後列の七尾・神田・丹羽は「関

西大学紛擾の真相」ビラに「学生大会本部委員」として名前がある。

【小パネル3 1927年 紛擾事件 発端と経過】

1922（大正11）年6月5日、関西大学は大学令による大学に昇格した。昇格にあたっては、文部省への供託金や大学のある千里山の整備費用として、少なくとも100万円が必要であった。そのための寄付金集めは、後に本学の総理事兼学長となる山岡順太郎が中心となって行っていた。寄付金で不足する資金は、専門部学生の授業料にたよる必要があった。大学令の基準を満たすために千里山の整備は率先して進められたが、専門部があった福島学舎は狭く、東海道線がそばを通過するなど不十分な教育環境のままであった。

そのような専門部学生の不満が、1927（昭和2）年10月23日開催の第2回大学祭の陸上競技大会で、専門部に不利な判定をしたとの理由をきっかけに、一挙に噴出した。そして、10月26日の緊急学生大会で、宮島綱男専務理事兼教授の辞職ほか10カ条の要求を掲げて同盟休校に入り、卒業生も支援する事態となった。

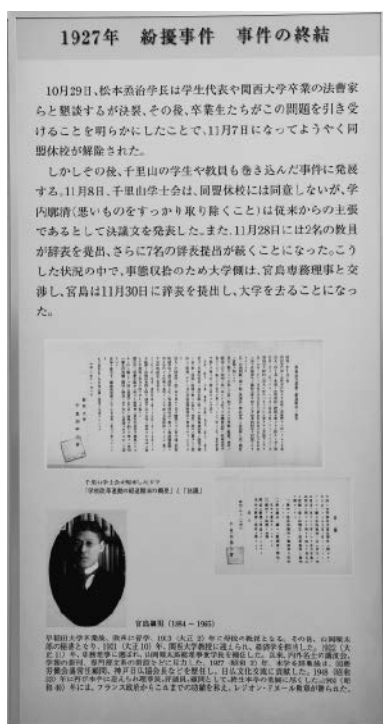
写真1 1928（昭和3）年の卒業証書授与式順序（式次第）。

大学に比べて専門部の在学生が多いことがわかる。

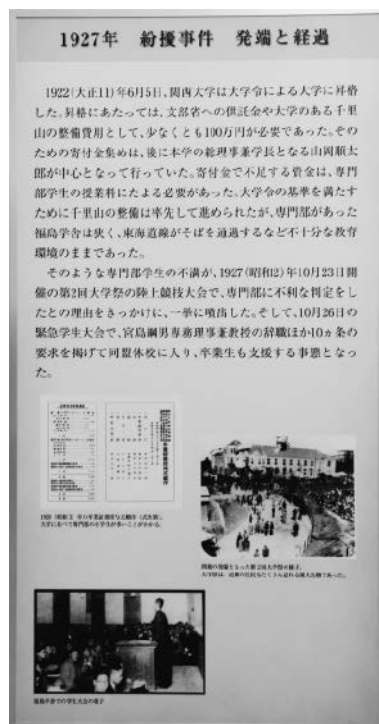
写真2 問題の発端となった第2回大学祭の様子。大学祭は、近

隣の住民もたくさん訪れる関大名物であった。

写真3 福島学舎での学生大会の様子



小パネル4 「1927年 紛擾事件 事件の終結」



小パネル3 「1927年 紛擾事件 発端と経過」

【小パネル4 1927年 紛擾事件 事件の終結】

10月29日、松本丞治学長は学生代表や関西大学卒業の法曹家らと懇談するが決裂、その後、卒業生たちがこの問題を引き受けることを明らかにしたこと、11月7日になってようやく同盟休校が解除された。

しかしその後、千里山の学生や教員も巻き込んだ事件に発展する。

11月8日、千里山学生会は、同盟休校には同意しないが、学内廓清（悪いものをすっかり取り除くこと）は従来からの主張であるとして決議文を発表した。また、11月28日には2名の教員が辞表を提出、さらに7名の辞表提出が続くことになった。こうした状況の中で、事態収拾のため大学側は、宮島専務理事と交渉し、宮島は11月30日に辞表を提出し、大学を去ることになった。

宮島綱男（1884～1965）

早稲田大学卒業後、欧州に留学、1913（大正2）年に母校の教授となる。その後、山岡順太郎の秘書となり、1921（大正10）年、関西大学教授に迎えられる、経済学を担当した。

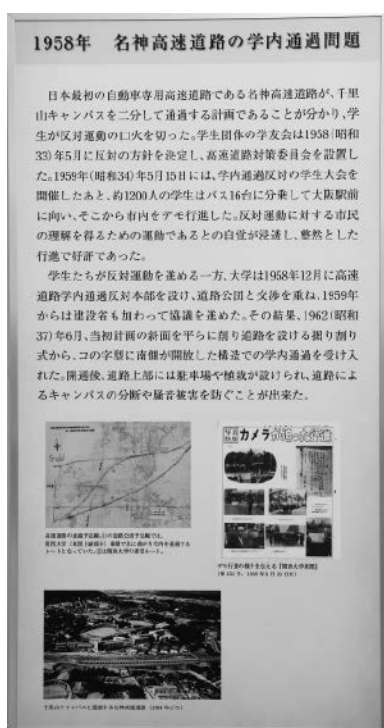
1922（大正11）年、専務理事に選ばれ、山岡順太郎総理事兼学長を補佐した。以来、内外名士の講演会、学報の創刊、専門部文科の開設などに尽力した。1927（昭和2）年、本学を辞職後は、国際労働会議常任顧問、神戸日仏協会会長などを歴任し、日仏文化交流に貢献した。1948（昭和23）年に再び本学に迎えられる理事長、評議員、顧問として、終生本学の発展に尽くした。1965（昭和40）年には、フランス政府からこれまでの功績を称え、レジオン・ドヌール勲章が贈られた。

写真1 千里山学生会が配布したビラ「学校改革運動の経過顛末の概要」と「決議」

写真2 宮島綱男肖像

【小パネル5 1958年 名神高速道路の学内通過問題】

日本最初の自動車専用高速道路である名神高速道路が、千里山キャンパスを二分して通過する計画であることが分かり、学生が反対運動の口火を切った。学生団体の学友会は1958（昭和33）年5月に反対の方針を決定し、高速道路対策委員会を設置した。1959（昭和34）年5月15日には、学内通過反対の学生大会を開催したあと、約1200人の学生はバス16台に分乗して大阪駅前に向い、そこから市内をデモ行進した。反対運動に対する市民の理解を得るための運動であるとの自覚が浸透し、整然とした行進で好評であった。



小パネル5 「1958年 名神高速道路の学内通過問題」

学生たちが反対運動を進める一方、大学は1958年12月に高速道路学内通過反対本部を設け、道路公団と交渉を重ね、1959年からは建設省も加わって協議を進めた。その結果、1962（昭和37）年6月、当初計画の斜面を平らに削り道路を設ける掘り割り式から、コの字型に南側が開放した構造での学内通過を受け入れた。開通後、道路上部には駐車場や植栽が設けられ、道路によるキャンパスの分断や騒音被害を防ぐことが出来た。

写真1 高速道路の通過予定線。①の道路公団予定線では、関西

大学（地図上緑部分）東側で急に曲がり学内を通過するルートとなっていた。②は関西大学の希望ルート。

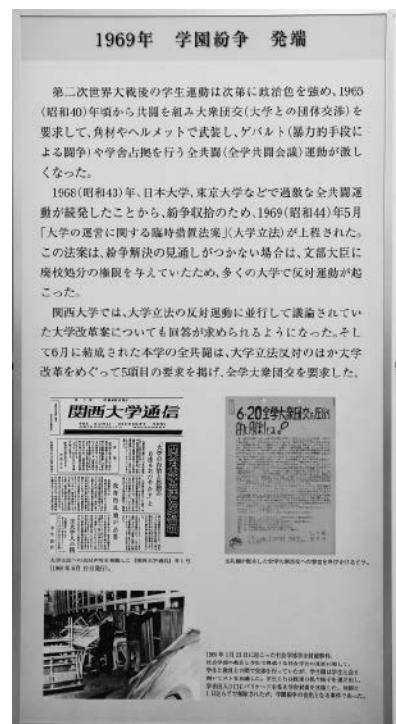
写真2 デモ行進の様子を伝える『関西大学新聞』（第151号、1958年5月25日付）

写真3 千里山キャンパスを通過する名神高速道路（1964年ごろ）

【小パネル6 1969年 学園紛争 発端】

第二次世界大戦後の学生運動は次第に政治色を強め、1965（昭和40）年頃から共闘を組み大衆団交（大学との団体交渉）を要求して、角材やヘルメットで武装し、ゲバルト（暴力的手段による闘争）や学舎占拠を行う全共闘（全学共闘会議）運動が激しくなった。

1968（昭和43）年、日本大学、東京大学などで過激な全共闘運動が続発したことから、紛争収拾のため、1969（昭和44）年5月「大学の運営に関する臨時措置法案」（大学立法）が上程された。この



小パネル6 「1969年 学園紛争 発端」

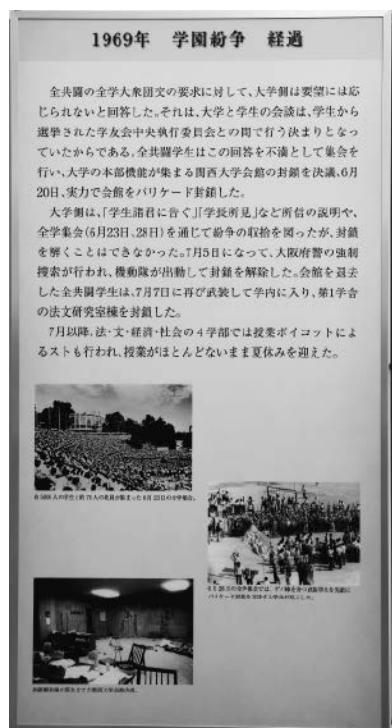
法案は、紛争解決の見通しが見つからない場合は、文部大臣に廃校処分の特権を与えていたため、多くの大学で反対運動が起こった。

関西大学では、大学立法の反対運動に並行して議論されていた大学改革案についても回答が求められるようになった。そして6月に結成された本学の全共闘は、大学立法反対のほか大学改革をめぐって5項目の要求を掲げ、全学大衆団交を要求した。

写真1 大学立法への反対声明を掲載した『関西大学通信』第1号（1969年6月19日発行）。

写真2 全共闘が配布した全学大衆団交への参加を呼びかけるビラ。

写真3 1969年1月21日に起こった社会学部学舎封鎖事件。社会学部の教員と学生で構成する社会学会の運営に関し



小パネル7 「1969年 学園紛争 経過」

て、学生と教員との間で交渉を行っていたが、学生側は学生大会を開いてストを決議した。学生たちは教室の机や椅子を運び出し、学舎出入り口にバリケードを築き学舎封鎖を実施した。封鎖は1日足らずで解除されたが、学園紛争の前兆となる事件であった。

【小パネル7 1969年 学園紛争 経過】

全共闘の全学大衆団体の要求に対して、大学側は要望には応じられないと回答した。それは、大学と学生の会談は、学生から選挙された学友会中央執行委員会との間で行う決まりとなっていたからである。全共闘学生はこの回答を不満として集会を行い、大学の本部機能が集まる関西大学会館の封鎖を決議、6月20日、実力で会館をバリケード封鎖した。

大学側は、「学生諸君に告ぐ」「学長所見」など所信の説明や、全学

集会（6月23日、28日）を通じて紛争の收拾を図ったが、封鎖を解くことはできなかった。7月5日になって、大阪府警の強制捜索が行われ、機動隊が出動して封鎖を解除した。会館を退去した全共闘学生は、7月7日に再び武装して学内に入り、第1学舎の法文研究室棟を封鎖した。

7月以降、法・文・経済・社会の4学部では授業ボイコットによるストも行われ、授業がほとんどないまま夏休みを迎えた。

写真1 約5000人の学生と約70人の教員が集まった6月23日の全学集会。

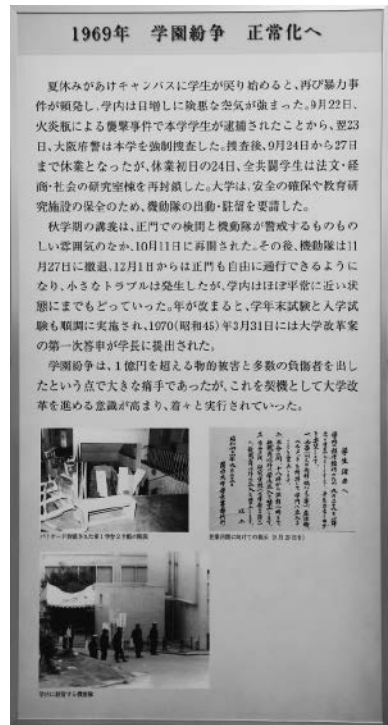
写真2 6月28日の全学集会では、ゲバ棒を持つ武装学生を先頭にバリケード封鎖を支持する学生が乱入した。

写真3 封鎖解除後の荒れはてた関西大学会館内部。

【小パネル8 1969年 学園紛争 正常化へ】

夏休みが明けキャンパスに学生が戻り始めると、再び暴力事件が頻発し、学内は日増しに陰湿な空気が強まった。9月22日、火炎瓶による襲撃事件で本学学生が逮捕されたことから、翌23日、大阪府警は本学を強制捜査した。捜査後、9月24日から27日まで休業となったが、休業初日の24日、全共闘学生は法文・経済・社会の研究室棟を再封鎖した。大学は、安全の確保や教育研究施設の保全のため、機動隊の出動・駐留を要請した。

秋学期の講義は、正門での検問と機動隊が警戒するものものしい雰囲気の中、10月11日に再開された。その後、機動隊は11月27日に撤



小パネル 8 「1969年 学園紛争 正常化へ」

な資料（紙資料が中心）の展示を行った。展示資料と資料の解説文は次の通りである（本文横書き）。

「関西大学学友会雑誌」

1914年の母校改革運動の結果、これまで学校当局が管理していた学友会の自治が確立した。新しい体制の下で活動を始めた雑誌部は、『関西大学学友会雑誌』の編集発行（年刊）を開始した。第1号は「自治記念号」と銘打って1915年7月の卒業式にあわせて刊行した。

『学友会雑誌』には、学生や教員の論文のほか、単価や俳句を載せる文芸欄や、クラブ活動の戦績報告なども掲載された。

「関西大学向上記念メダル」

1922年、関西大学が大学に昇格したあと、専門部学生は、大学と専門部の格差解消を求めて活発な運動を展開した。その結果、専門部卒業生は、高級官僚の採用試験である高等試験の予備試験の免除と、大学学部入学の資格が認められた。その記念として向上記念メダルが作られた。メダルに刻まれた1924年5月22日は、資格認定が官報に告示された日付である。

「腕章」

1969年の学園紛争の時期に、学内の巡回や正門での検問にあたって大学教職員が着用していた腕章。

退、12月1日からは正門も自由に通行できるようになり、小さなトラブルは発生したが、学内はほぼ平常に近い状態にまでもどっていった。年が改まると、学年末試験と入学試験も順調に実施され、1970（昭和45）年3月31日には大学改革案の第一次答申が学長に提出された。学園紛争は、1億円を超える物的被害と多数の負傷者を出したという点で大きな痛手であったが、これを契機として大学改革を進める意識が高まり、着々と実行されていた。

写真1 バリケード封鎖された第1学舎2号館の階段

写真2 授業再開に向けての掲示（9月29日付）

写真3 学内に駐留する機動隊

三 展示資料

縦型展示ケースには、関西大学創立以降の学生運動にかかわる様々



展示資料

「関大情報と関大通信速報」

『関大情報』は、紛争に関する情報が入り乱れて混乱することを防ぐために、時系列で紛争の経過を記録して編集発行された。1969年6月25日発行の第1号から、1969年8月25日の第4号まで出された。

『関大通信速報』は、『関大通信』が月刊であったため、より正確な情報共有のために、随時編集発行された。1969年10月16日に第1号から、1985年11月19日の第170号まで出された。

「ハイジャックと豆の木」

関西大学工学部自治会発行の冊子。国内外の情勢を分析し、工学部自治会の運動方針を示す。「武装闘争のために 栄養分析表（抜粋）」が付録に掲載され、「爆弾の季節」という物騒な副題の通り、ラムネ弾、バンガロール爆雷、モロトフ・カクテル（火炎瓶）などの爆発物の作り方が図入りで解説されている。目次は次の通り。

- 第1部 我々をとりまく情勢と工学部自治会の方針
- 第2部 諸団体からの投稿論文
- 第3部 60年代から70年までの学生運動史
- 第4部 新左翼諸党派からのアピール
- 第5部 書籍の紹介
- 第6部 付録

（年史編集室）

